

日本プロレタリア文学集・17



ロレタリア文学集・17

旗
ナツプ
作家集
4

日本プロレタリア文学集・17

「戦旗」「ナツプ」作家集 四

定価 二六〇〇円

一九八四年十一月二十五日 初版

発行者 松 宮 龍 起

発行所 株式会社 新日本出版社

〒151東京都渋谷区本町一の八の七
電話 (〇三)三三〇一七一一
振替 東京 三一三六八一

印刷所 光陽印刷株式会社
製本所 みさと製本印刷株式会社

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

日本プロレタリア文学集・17

「戦旗」「ナッポ」作家集
(四)

目次

大森二郎

トロッコを押す……………九

三月十八日……………三

橋と飴屋……………三

P N パン製造所……………君

壺井繁治

踏みつけられる麦……………三

兵營へ……………六

兄の同志に送る手紙……………三

明石鉄也

スケッチ風のデスマスク	二九
起重機	二三
冬　眠	四三
火線の構成	一五
故　郷	六五

林　房雄

林　　檣	二〇
絵のない絵本	二五
繭	三二
N監獄署懲罰日誌	三九
鉄窓の花	四七
鎖	五七

藤沢桓夫

日曜日 二六九

子供 二七四

ローザになれなかった女 二七九

傷だらけの歌 二九三

燃える石 三〇三

漁夫 三〇七

海岸埋立工事 三六二

解説 佐藤静夫 四三

発表年月日と掲載文献 四一

大森二郎

トロツコを押す

汽車の出でしまった後の半時間を、啓吉達は震えながらストーブにへばりついてた。

ガラんとした室内は荒れはてた冬がたむろうている様にさびれきっていた。コンクリはかわき、風は絶え間なく硝子戸をゆすって……駅夫のかける声にも生気がない。その様な室でも一人来……二人かけ込んで来る人の息が、何時か、にぎわしく其処を暖めてくれるのだ。

啓吉達はただそれを待っていた。そして戸の開く毎に彼等を笑顔を持って迎えた。

——「まあ、あたんな」——

寒そうに懷手をしたり、襟巻きを首にまきつけた百姓等や、赤坊を脊負ったおかみさん等が忽ちストーブを囲んだ。「ひでえ寒さですな」

「ほんとにねえ」彼等はお互に身をよじり合った。恨めしそうに手をつつこんだばかりで、ストーブを離れた見窄らしい月給取は中腰になって腰掛の上で震えている。

苛々しく室内を歩きまわる職人。すっかり肩掛けにうずまった娘。

ボンヤリ啓吉はかわるがわる集まって来る人達をみていた。彼の心は重く不安であった。

「何処へつれてゆかれるのかしら」……百姓等の頭越しに彼は連れの老人をみた。

小さな老人は腕組みして地図を眺めている。帽子をあみだに冠り、口をぐつと結んだ彼は恐ろしい悪党の様に啓吉に思われた。黒い影が老人の中から啓吉に伝って来る。

啓吉は眼をそらして、金物屋によびかけた。

「じいさん、何やってるんだらう」

「なに」一寸左眼に繻帶した……浅黒い顔をあげたきり金物屋は腰をたて様とせぜずストーブの火を一心にかきまわしていた。

啓吉は仕方なくそのまま黙ってしまった。眼をとじて、彼は騒々しい話声の内に沈みこんでいった。

三人はどうして落ち合い、これから何処へゆこうとする

のか。昨夜遅く啓吉が烈風に吹れて、漸くたどりついた安宿で、彼等二人に出会ったのであった。そして今朝啓吉が、又当て途もない旅に出ようとして餅を焼いていた時、二人が見兼ねてメシを食わせた上、憐む様に老人が尋ねたのだ。「おめえさん何処へゆく積りかね」

啓吉は悲しく答えた。

「Y港へでもいいって船人夫にでもなる積りだが」

「船人夫？……おめえさんそんな位なら、悪い様にはしねえから俺と一所に来なよ。……大將も昨日東京から引っぱって来たのだ」老人は金物屋をさしながら啓吉にそうすすめた。

当てのない啓吉は嬉しくなった。彼はすぐ一所にゆく事にきめた。

だが宿を出る時、啓吉は赤坊を抱えた中年の猿廻しにふすまの陰によびよせられた。声をひそめて彼は云うのであった。

「気をつけな、油断しねえ方がいいぜ」

「大丈夫だ」……啓吉はそれを一笑にふして、元氣に街のかわいた土をふんだのだが、啓吉は今ふとつぶった眼の内じつと彼を見送っている猿廻しの眼を思い浮べた。

「油断するなよ」眼が又云いかけている。

啓吉は舌打ちした。「馬鹿馬鹿しい」啓吉は頭をふって幻影をかき消そうとした。

もう発車間近なのだろう。構内にはわかにせきや下駄の音でざわついて来た。

彼も氣を転ずる様にストロブを離れて室内を歩きまわった。

ふと彼は群集の中に老人をみつけてぎよとした。みも知らぬ二三人の朝鮮人と何やらヒソヒソ老人が話しをしているではないか。全く悪事の相談でもあるかの様に声を落して。

啓吉は再び重い不安に包れて耳を傾けた。

何も訳らない——ただ首をふる老人のむずかしい顔だけが不思議に啓吉に力を与えた。啓吉はその力に励まされつつプラットホームに出た。そして汽車が来るまで彼は何物かを探す様に地面をみつめながらあちこちと歩きまわった。啓吉のその様な——小さな包み一つ抱え、ヨレヨレのしやつと洋服に身をつつんで歩く姿は、工場からたつた今街頭へたたき出された、哀れな失業者の姿にもみえたらう。多くの眼が彼に注がれた。啓吉は黙ってそれ等を脊に受けるより外なかった。

寢床のない小さな浮浪者——啓吉は弱々しくつぶやいた。

傷ましい過去が思うまいとしてもおつかぶさつて来る。

孤児の啓吉はどうして育ったかも訊らぬ程に、幼年時代はただひもじさと恐ろしい寒さでうずめられていた。

孤児院を逃げ出した彼は、あちこちの家から家を渡つて、つい二三日前までとある大きな街の金物屋で小僧をしてもらったのだ。

だが其処とて決して彼を喜ばせる場所ではなかった。どんな欲な主人は二言目には「豚」——と罵つて朝から晩まで犬の様に彼をこき使った。

彼は三年齒をくいしばつてこらえた。彼の大きくなった胸には、早く番頭になろうと云う望がわいたのだ。何と云う、はかない望だったろう。彼は朝早くボーと云う汽笛がなる頃、家の前を隊伍をなして群れてゆく職工等の元気な声をきくにつれ、彼は遂に忠実な、どれいになろうとする馬鹿げた望をたたきすてた。

「もっと立派な生活があるに違いないんだ」

「逃げ出そう」彼はとうとう僅かばかりの金を持って家を出てた。

「家なしだ……家なしだ」だが啓吉はもう過去にとらわれるのがいやになった。

「勝手にしやがれ」彼は人々をしりめにかける様に独言云

いながら、前にとまっていた汽関車をみた。

彼は真赤に燃える石炭をみた……鋼鉄で包れた汽関車の中で真黒になつて石炭をくべる火夫をみた。顔は油でよごれている……だが青い彼の服には何か輝かしいものがあるのではないか。

啓吉は不思議に活気づいて機械と火夫にみとれた。

「おーい」老人の彼を呼ぶ声がしたと同時に汽車が滑りこんで来た。

目的地は七八里先の河と原と田畝の中にたつ小さな町であつた。

汽車を下りると——啓吉は見知らぬ町を歩く異国人めいた気持で彼等の後からついていった。三人は駅近くの酒場で酒をのんだ。其処は老人にはなじみしかなかった。彼は色色と肥つた其処の主人と親しい口をきいていた——啓吉は黙つて金物屋と飲んでいたが彼等の話は変に耳慣れぬ調子で響いた。

啓吉はなんだか頼りない気がした。今は金物屋だけが頼りだ。

啓吉はなつかしい気持ちでいろいろ彼と話したかった。それなのに金物屋は啓吉を相手にしようとしなかった。

間もなく彼等は老人のいる家へ向つた。

薄ぎたない路次や、田舎町らしいさびれた往来を横ぎり田の中を渡つて道がやや傾斜し始めた頃家がみえ始めた。

家は桑の木や笹藪で取り囲れた平家であつた。其処に十二三人の者が寝泊りしていた。皆小林組の者で鉄道工事に従事しておるのだと道々老人が啓吉の心を固める様なそんな話をした。

家についたのはもう暮方近かつた。西陽が田に面した障子にさして田舎らしい静けさが辺をこめてゐる。

誰も出払つた後とみえて室内のガランとしているのが妙に啓吉の心をとらえた。

金物屋と啓吉は上り口の八畳で待たされた。老人は直ぐ仕事場へ出かけていった。

彼が頼んでいったのか間もなく二十二三のおしの様な娘が、メシを運んで来た。女は膳立を済せると又黙つて引きこんだ。空腹の彼等は貪る様に食つた。食い終えると彼等は火ばちに向い合つた。

啓吉は満腹した。啓吉は、自分の心が金物屋の中に流れこんでゆくのを覚えた。

「兄貴」——啓吉は今こそなつかしく金物屋をよびたかつた。

「おう」——きつと彼も笑顔で迎えてくれるに違いない。

堪らなくなつて啓吉は胸をおどらして彼の身の上話を語り出した。

金物屋は次第にひきいれられた……彼は熱して合づちさえうつた。

「俺も話そう」話し終えると金物屋が彼の眼隠しした眼の由来を語り出した。

それによると傷は、彼が四五人の暴漢を相手に、唯一人で闘つた時の名譽傷との事だつた。

彼はその場の光榮を非常に誇らし気に語つた。

「なに、尺八一本持つてさえすりや奴等の四人や五人訳ねんだが」……彼は残念そうにそう云うと眼隠しをとつてみせた。

成程眼が半分つぶれて、皮がひきつっている。

「ひどくやられたんだね」——啓吉は同情する様に云つた。「ああ」金物屋は笑いながら再び眼をかくした。今は眼隠しさえ啓吉には親しかつた。

外では冬の短い日が暮れかかっている。

五時頃の汽車だろう。さびれた汽笛を鳴らしてゆき過ぎるのが遠くきこえる。

二人はしばらく黙つていた。

誰か帰って来る——彼等は心待ちに人々を待った。足音がきこえた。間もなくドヤドヤと元気な声をあげながら皆が帰って来た。

中年の男を中にした五六人の若者。此家の主人らしい六十に近い善良そうな老人。息子らしい眼鏡をかけた馬鹿で横柄な若者、小利巧そうな若い会計——彼だけは小商人に近い姿をしていた。最後に脊の高い赤顔の下士官に似た残忍性を帯びた世話役等が歌をうたったり、笑ったりしながら入って来た。室内は忽ち荒い男の息と頑強な足音で満された。彼等がキャハンをとると「メシ」だ。大きな食卓に車座になって彼等は山盛りのメシをかきこんでゆく。

啓吉と金物屋は其処で皆んなにひきあわされた。彼の身すばらしい体格をみていた世話役は厄介な者を脊負いこんだと云わぬばかりに苦虫をかみしめていた。

「まあ、やってみるがいいさ」——彼は一言云ったきりだった。

「何んで、つっけんどんな奴だ」——啓吉はぐつと胸に来た。

翌朝啓吉等は四時にたたき起された。

彼は疲れて起きあがるのが辛かった。

だが人々はもう薄暗い電灯の下で黙々と寝具をたたみ、

手拭いを掲げ、早い者ははや足に巻ゲートルをつけているのだ。

「ぐずぐずしちゃいけない……飛び起きて一所にゆかないやらない」……啓吉は勇気を出してはね起きた。

外は未だ真暗であつた。——凍る様な寒い空に星がチラチラまたたいている。

外を流れる小河で啓吉は顔を洗った。

ぶるっとして冷気が心臓にまでしみ入る。彼はその胸震いで——思わずどなりたくなつた。

「おい、畜生」だが町は森閑として総べては未だねむっていた。啓吉は呪いに自分の心が変ってくるのを覚えた。

だが朝の冷気は遠慮なく顔に吹きかける。

内では世話役のどなる声がする。

啓吉は仕事場に向う途中も不服でならなかった。彼はうつかりそれを口走った。

「皆こんな早いもんさ——俺なんぞ何時も割引電車ばかりだったぜ」——金物屋は無難作に啓吉に云うと敷島をくゆらしてスタスタ畝の上を渡っていくのであつた。仕方なしに啓吉も黙ってついてゆくより外なかった。同じ様な黒い影が後になり先になり田を下ってゆく。

夜は漸く明けかかつていたが寒さは一層きびしかった。

土や小河は氷を張り田は真白に霜におおわれていた。ザクザク霜柱の割れる音が続く。

仕事場は家から七八町離れた田の中にあつた。其処で啓吉達は××から××へ新に敷れる鉄道工事をやろうとするのであつた。

もう工事は遠く山の麓から傾斜をなしカーブをなして敷かれてゐる。基礎工事の赤土を中心にトロッコや線路やセメント樽や砂利などをうず高くつんできびしい夜明けの空気の中に、いずれも霜をかぶりうちすてられた残骸の様に横つてゐる。

夜が全く明けるまで彼等はセメント樽をわつて火をたいた。火は赫々と、パチパチ音をたてて燃えた。彼等はぐるっとそれを取り巻いて仕事を待つ暫しを体を暖めた。だがほんの東の間漸く夜が白んで、山々がその枯れはてた灰色の表に光を受け、家々から微かに煙がたち登り始めた頃——彼等はもう昨夜来地に凍りついた道具をこもをはねて取りあげねばならなかつた。「おう」あの世話役が顔を真赤にしてどなつて来たのだ。「さあやった。やった。何をぐずぐずしているんだ。」彼は一座をにらみ廻した。彼等は黙つてゐる。世話役はどなりつつける。

「やろう」遂に中年の男は一言云うと真先に立ち上つた。

「やろう」——黙々として彼等は仕事についた。

スコップを持った中年の男が冬空をきつて赤土の上に登つてゆく。同じ様な一隊が続く。

「おーい」「おーい」——お互に呼び交す彼等の声が異様な激しさで空をつんざいて来る。

「お前はスコップを持って穴をほれ」——世話役がボンヤリしている啓吉をみてどなつた。

仕事が始まつた。つるはしで穴の壁を切り崩す者——その土を運び出すもの。啓吉はスコップでバラスをかき集めた。

四五人はトロッコを押して、上手の方へいった。彼等の鼻歌が夜明けを知らせる様に響いて来る。啓吉の足はかじかみ指は真赤に自由を失つた。間もなくゴーツと云う鈍重な音をたてながら土を積んだトロッコが下つて来た。「そら来た」——待つてゐた男達が力を合せてぶちまけると、又掛声かけて坂道を二人で苦しうに押しあげてゆく。

太陽があがりかけた。真赤なよみがえさせる様な東の空。氷の上にも陽が照り出す。総べての上に。が、北風もひゅうひゅう、乾草を吹きまくり出した。

彼等の上にも遠慮なく吹きかける。穴を掘り、石を運び、トロッコをあける彼等の上にも。